

南方

セブ島防空戦記

宮城 眞 佐藤 義 廣

忘れもしない昭和十九年九月十日、銀の翼の四発B24がセブ飛行場を偵察に飛んできた。敵機とは知らず、日本でもこんな立派な飛行機を製造したので絶対負けないと隊員同志で話をしていた。翌十一日午前九時ごろ曇天の雲の中から飛行場めがけてグラマン八〇〇九〇機が息つく暇もなく銃撃してきた。佐野隊では「配置につけ撃ち方始め」の号令で二四門の二五_リ機銃が一斉に火をふいた。爆撃の破裂音、グラマンの銃撃音、わが隊の撃ち上げる二五_リ機銃音で互に話す言葉も良く分からないほどの修羅の巻と化した。

騒々しい時間が三時間ほど続いた。というのはグラマ

ンが空母から飛び立ち八〇〇九〇機が交替で一時間間隔で都合三回やってきたからだ。日本海軍比島方面最前線セブの虎の子、零戦を主体とした飛行機は、前夜徹夜で積んだ爆弾、燃料を満載したまま忽ち燃え始めた。その中に機銃弾が豆をいるようにバンバンとはじき始めた。翼下に装填した爆弾がズドーンと破裂する。もうもうと燃える飛行機、バンバンと炸裂する機銃弾破裂音、初空襲で不意をつかれ一〇〇機ぐらいあった零戦を半分ぐらい失った。

敵機が去ると撃ち方をやめて人員報告。私は三小隊だった。二番銃発射弾数三〇〇、人員兵器異常なし。途端に鉄かぶとの重みと熱いのをガクンと感じた。戦闘中はカラッポの頭のような。初空襲の機銃掃射で、一小隊では猪熊一水と成田一水がやられ、三小隊では柴山一水が爆弾で吹き上げられた土塊の下になり戦死した。

午後五時ごろ戦果を聞いた。撃墜一七機、爆破二八機、

発射弾数二万一〇〇〇発。アメリカの搭乗員は臆病だと聞いていたが機銃掃射をしながら急降下爆撃をし、急上昇する万全なものであった。これからB 24やB 29、B 25等大型機と戦爆兼用機の空襲が日ごとに激しくなった。飛行場周辺は大型爆弾が大量に落され直徑七、八間、深さ三、四〇尺も掘れた穴が無数にあき、スコールで水が一杯にたまり夜は危険でとても歩けなかった。

日は忘れたがセブ北部からB 25の三機編隊を発見した。「配置につけ」零度（水平方向）を双発機三機が低空で飛行場に向かってくる。対空戦撃ち方始めで、二四門の機銃は一斉に火をふいた。敵機は飛行場の手前からバリバリと機銃掃射をしながら上空に達すると、白い落下傘が三機の下腹部から上空が白くなるほどバラ撒かれた。落下傘部隊だと思ったら地上に落ちると同時にバンバンと破裂した。一機は飛行場のど真中に撃墜、一機は司令部の近くに撃墜、一機は白煙をなびかせて去った。そして昭和二十年三月二十六、七日タリサイより遂に米軍は上陸を開始した。大西山の八合目に機銃陣地が横穴式に築いてあり、そこに二五ミ機銃一門、機銃弾一〇

〇〇発があげてあった。私たち五人の銃員が二十八日にこの陣地に配置された。午前十時ごろまでかかってやっと機銃を据え終わり、煙草をのんでいるとパリパリと銃声が聞こえてきた。友軍の機関銃の音とは違うので、マングローの枝をすかしてみると敵軍が長蛇の列をなして大西山へ進んでいく。勝手に戦闘開始は出来ないので本部へ伝令をだした。

本部から将校が兵二人を連れて来て双眼鏡で見ている。「配置につけ、目標向山の三本椰子の根元、撃ち方始め」、機銃は火をふいた。「もっと右もっと右」の号令で弾着を修正しながら撃つと、手前の敵が応戦してきた。銃がんに当たった小銃弾が岩を飛ばしその破片が顔に当たってやられたと思った途端、幅四尺、高さ三尺くらいの火柱がパッと上がった。その時本部から「引けっ」と連絡が来た。何事かと銃員と陣地から出て二〇尺も走ったが、機銃をそのままにしては味方が撃たれる。尾栓をはずすため、私とほか一人が陣地へ戻って尾栓をはずし下の沢へ走った。

負傷した陸軍の下士官、兵五、六人が抜き身の軍刀を杖について来た。「海軍さん今ごろなんだ、大西山は占領された。今撃ったのはおれたちだ。『引け』の連絡で引き揚げて来た」と言った。翌日聞いたが昨日の大西山の戦果は大型戦車一台炎上、歩兵殺傷五〇人だったという。

沢から一〇〇呎くらい登ると稜線だ。稜線を越えれば安全だと思ひ銃員と一目散に登ったが、敵は迫撃砲を連続して撃ってくる。ダダーピーンと迫撃砲の弾片が頭上を飛ぶ。沢伝いに逃げたが、もう元の陣地へは帰れないと思ひ半日待っていた。尾栓は川の中へ棄てた。迫撃砲の射撃が止んだので、夕暮れにやっと隊へ戻った。

翌日、桜井兵曹長以下は迫撃砲で全滅した。その夜は弔い合戦とばかり、全員桶高地の稜線に三層間隔で散開した。真夜中「佐藤、敵だ」と二、三人の戦友が連絡にきた。猫のように足音をたてずに近づいて見ると、敵が一人伏せをしている。しばらく見ていたが動かないので、もしやと思ひ私は銃剣を右手に、後に回ってけとばした。動いたらブツリやる積りだったが、動かない。顔に手

を当てて見ると冷たくなっていた。のどがからからなので敵兵の水筒を振ってみたら水が残っていたが、死人の持った水だと思ふと途端にのどのかわきも治まってしまった。

背のうに手を突っ込んでみると、一番上に携帯ラジオのような物が入れてあった。背のうの外ポケットを見ると、煙草が五個宛入れてあった。私は背のうをはずして背おった。水筒も取った。ヘルメットをはずして見ると、前がえぐれていて見通しが良い。かぶって見ると大きくてガブガブだが鉢巻きをしてかぶれば良いと思ひ、ヘルメットも取った。煙草は戦友に分けてやった。

その時「機銃隊整列」の号令がかかった。小銃を渡すのかと思つたら、今までの炊飯所は敵に囲まれて使えなくなつた。軍需部から貰うことになつたので軍需部の炊飯所を知つた兵隊はいないか。「佐藤知っています」「では飯あげに一〇人やるから夜の明けぬうちに陣地へ戻ってこい」「はい」と私が先頭で陣地を出発した。

炊飯所に着いて「高見隊から飯あげにきました」というと、「お前たちどこだ、我が隊の名簿にはないが誰に

言われてきた」という。よく聞いてみると目指す炊飯所は、さらに二キロくらい下の炊飯所なそうだった。私は青くなった。しかし責任者の兵曹長の質問に対して「大西山で戦闘中です」と答えると、兵曹長は「大西山は一番の激戦地だった。大西山の戦闘、誠にご苦労です。飯は大西山優先で出す」という。私は涙がでるほど嬉しかった。

現在人員二三〇人分の飯を貰って炊飯所を出発した。

飯上げ十日目ごろ夜中に山中で将校五、六人に会った。

「お前たちどこだ」「高見隊です」「友軍は今晩非常転進をすることになっているが知っているか」「知りません」「では急いで本隊に帰れ。隊では七日間敵の中を通るので絶対煙はだすな」という命令でした。

話とはぶがダナオ川の高みに下土哨に出された時のことである。三十分交代で双眼鏡で見張りをしていた。いま五分くらいで瀬尾上水と私は交代番であった。その時敵の斥候らしい者約一〇人ほど発見した。佐藤本隊に伝令に出ると、百位登るとその山陰に大隊本部があった。「伝令下土哨地点より約三〇〇位先に、正規軍の斥候ら

しい者約一〇人、本隊の方に向かって前進中であります。更に五〇〇位先に敵の機動部隊らしいものが見えます。伝令終わり」隊長は「ご苦労」といった。

急いで帰ろうとすると観測機がやってきた。見つかったらお陀仏と現地民の空壕に脱兎のように駆け込んだ。現地民の家にはバナナをどっさり獲ってあった。食べごろなのでバナナを食っていたが、観測機が遠ざかったので、隊員を喜ばせようとバナナを持てるだけ持って下土哨に急いだ。下土哨に行くと瀬尾上水は、のどからほほを撃ち抜かれていた。手拭等で包帯をしてやったが、出血多量で駄目だった。

川べりでは敵さんと友軍との間で激しい撃ち合いが始まった。転進後、米や塩もなく栄養失調やマラリヤで大分やられた。佐野隊の元水本中尉が戦没者生存者の名簿を送ってくれたので分かったが、三六五人セブに上陸したうち、帰ったのは六〇人きりだった。

私は二十一年十二月二十四日名古屋港に上陸した。階級、氏名を書いた大きな看板を持ち多くの人が岸壁に迎えていた。国防婦人会の出迎えを受けたが涙で満足に

ご苦労さんと言えなかった。終戦後レイテで一年四か月捕虜生活をし、こき使われた。我が一二七防空隊（佐野隊）は、初空襲以来、撃墜総数一七九機と指揮小隊から聞いた。あとになったが二十年の三月二十一日の対空戦闘でB25一二機撃墜、南西方面司令官から電報による感状授与、さらに酒二升戴き各小隊で分けて呑んだ。

マニラ一番乗りの道は険しく

滋賀県 寺島 貞次

私は昭和十五年一月十日京都騎兵第二十連隊に現役兵として入隊したが、一年半で馬は返納し、我が部隊は捜索第十六連隊となり、機械化部隊軽装甲車および自動車部隊に変わりました。あのノモンハンにおいてソ連軍の戦車に蹂躪された悲惨な戦闘に対処するため、毎日昼夜訓練が繰り返されました。

昭和十六年十一月に入って、これから寒くなるのに新品の夏服が配布されました。これはきつと南方へ行くの

だなあと思ひ、小隊長や中隊長に聞いてみたが、どこか分からんとのことでした。そのうち「今度は生きて帰ると思うな、一泊の外出を許すから皆髪を剃って遺髪として家に置いてこい」との命令がでたのです。

十一月二十二日夜秘かに屯営を出発しました。大阪の港から七〇〇屯の東福丸に乗船しました。蚕の棚と同じような貨物船で畳一枚に四人が入り、梯子を登って膝で歩かねばなりませんでした。九州を出て奄美大島で約一週間上陸演習が繰り返された。

十二月八日、ハワイの奇襲攻撃が敢行され太平洋戦争に突入した。堂々の輸送船団が護衛艦に守られて比島へ向かった。敵の飛行機および潜水艦に対空対潜監視衛兵、不寝番、また食事当番と中々忙しいが皆船に酔って働けない。幸い自分は船には強かったので皆やってのけた。

二十二日未明、敵前上陸の命令が出た。空からは敵機の爆撃が続く中を、完全武装に身を固めて銃を手に暗闇の中、甲板より繩梯子を降り上陸用舟艇に飛び降りた。超スピードで敵前へ向かって突進した。とてもやないが近くまで行けない、背も届かぬ海岸で飛び降りた。待ち